

かん 神

逆川(さかさがわ) ①

かつては酒香川、酒匂川、鴨居川と呼ばれ、白井から流れる橋川と合流していた。筑波山麓の沢水が集まって川となり神郡北を通る。逆川上流から続く川沿いの用水路は、神郡西の水田を潤していた。

石橋跡 ②

神郡北から白井へ向う道は、明治末期に十字路にされた。それ以前は、十字路東にある二十三夜石橋供養塔ちかくより石橋がかかり、杉の大木があった。対岸には馬頭尊や文禄二年(1593年)の日待碑があり、かつては来迎橋があったという。神郡の市営駐車場横には、水神様と道祖神の祠も祀られている。

ずらしい。店蔵は江戸時代の建築。戦時中の空襲から逃れるために、蔵が黒く塗られたという。イベント時に公開され、米倉で民具の展示もある。

桜井邸の店蔵 ⑥

かつて店・質屋隠居に使われていた桜井邸の店蔵を平成十六年から平成二十三年に北条へ引越すまでより筑波大学の安藤邦廣先生が里山建築研究所として活用。古民家の再生や古い建築様式を現代建築に取り入れる研究がされていた。研究所の間取りにも欄間や無双窓などが活かされている。

蚕影神社の道標 ⑦

(明治十三年)建立。蚕の字が旧字体。蚕影神社(かげしんじや)道標より約1km東。養蚕発祥の地として「金色姫(こんじきひめ)伝説」がある。天竺から桑の舟で流された姫が、この地で権太夫(こんだゆう)夫妻に助けられたが、いつしか病で亡くなった。死後、姫は棺の中で蚕となり養蚕を伝え、恩返しをした(上写真は奉納された絵馬。館地区には「権太夫の宮」、逆川上流には「舟の宮」の石祠がある。本殿は江戸初期、拝殿は大正時代の建築。養蚕が盛んになった明治から昭和初期

には、全国各地から参詣者が訪れ、奉納された絵馬が絵馬堂に今でも残る。拝殿の裏に鉦泉跡。約二百の石段の上に神社があり、石段沿いの紅葉がきれい。毎年三月二十八日は蚕糸祭、十月二十三日には秋の大祭が行われる。春喜屋(はるきや) ⑨

昭和初期まで参詣者の旅館休憩所を経営。現在も、神社にちなんだ蚕影羊羹や手ぬぐいを売っている。敷地内に湧き水あり。

江戸初期の割本名主(井上領八ヶ村の名主を代表して年貢を集積し貢納する名主で、大飯田と呼ばれていた。飯田邸 ⑮

江戸時代、筑波山南麓の八カ村を治めていた旗本五千石の井上家の陣屋(役所)があり、つくば道沿いに門があった。現在は、宅地や農地となっている。陣屋跡 ⑭

かつて神郡地区と館地区に十近くあった井戸(湧水)の一つである。昔は井戸の回りに、しめ縄が張られていた。普門寺の裏参道沿いにある。市村豆腐店 ⑯

ど、住民の苗字や地区名の由来にもなっているが、現存しているのは神郡地区には他に一ヶ所(21で示す)だけである。石井邸 ⑳



一九五二年(昭和二十七年)建設の大谷石作りの米倉。点滅信号 ③

昭和天皇即位記念として一九二八年(昭和三年)に建立。白井筑波、北条土浦、立野小幡、大貫館林の各方面を示す。桜井邸 ⑤

つくば道沿いに店蔵2棟にはさまれた門がある。北側の母屋は大正時代に改築され、銅板の屋根は当時としてはめ

田井(た)ミュージアム ⑩

一九六十年(昭和三十五年)建築の大谷石作りの米倉を、平成十三年よりNPO法人自然生(じねんじよ)クラブがアトスペースとして活用。石の反響を活かしたシアターとアトリエがある。隣はイベント時にオープンのカフェソレイユがある。

かつてはこの地に田井村の役場があった。

大正初期創業。アンドーナツが有名。イベント時には祝事の和菓子「おしもの」を再現して販売する。桜井菓子店 ⑪

地域の信仰の場で、毎月二十一日に地域の女性が集まる講が行われる。御大師様とお講屋 (おこうや) ⑱

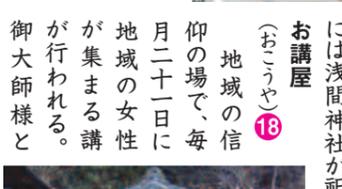
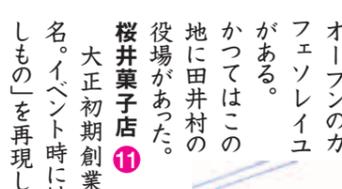
赤門が目印。江戸後期に割本名主となる。五層の茅葺屋根をもつ母屋は、役所や旗本の井上家の滞在場所にもなった。当時の様子を残す高い天井の部屋や資料がある。



馬頭尊 日待碑



田井小学校



ごおり 郡

つくば市都市計画図を基に作成